

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月12日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06542

研究課題名（和文）20世紀のイエズス会人文主義思想の展開 - B. ロナガンの倫理・教育思想を中心に

研究課題名（英文）The dynamism of the Jesuit humanistic tradition in 20th century - in terms of B. Lonergan's ethical and educational thoughts-

研究代表者

島村 絵里子 (SHIMAMURA, Eriko)

筑波大学・人文社会系・研究員

研究者番号：70802198

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代から現代に至るまでのイエズス会の人文思想の特徴を捉える為に、20世紀の北米のイエズス会を代表する思想家であるB.ロナガンの思想に注目した。特に「歴史」と「世界観」という二つの観点を軸に据え、ロナガンの文献を検証した。その結果、ロナガンが、従来のカトリシズムの伝統を保持しつつ、現代の自然科学および歴史哲学の観点を統合する形で、創造的な人間理解を提示していることを明確にした。そこから、20世紀のイエズス会人文主義思想を、この世界から乖離した静的精神性ではなく、その時々々の思想的潮流と積極的に対話し応えることを目指す知的ダイナミズムとして特徴づけることができるという結論に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、日本におけるイエズス会思想史研究はどちらかといえば16世紀（切支丹時代・ルネサンス時代）に重点が置かれ、20世紀のイエズス会思想は研究対象として十分に主題化されてこなかった。本研究では20世紀の代表的なイエズス会の哲学者・神学者の一人である、バーナード・ロナガンが提示している人間の「本性」と「歴史性」を基軸にした倫理思想を探ることにより、20世紀のイエズス会思想を特徴づける知的ダイナミズムを提示できたと思われる。またロナガンによる現代思想における伝統の再解釈の姿勢に着目することを通して、20世紀のトミズムの特徴の一端を明示できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research project, to articulate the characteristics of Jesuit's humanism tradition in modern context, we focus on the two important themes, 'history' and 'world' in B. Lonergan's philosophical and theological enterprises. Especially, we verify how Lonergan grasps human being as ethical subject based on his epistemological and ontological reflection on human interiority. Through these investigations, it becomes clear that, without discarding scholastic tradition, Lonergan learns enthusiastically from modern natural sciences and philosophy of history in his contemporaries to establish his anthropological and ethical viewpoint. We conclude that Jesuit humanism can characterize Jesuit's humanism tradition in 20th century not as otherworldly spirituality but as intellectual dynamism which positively discern meanings and values in contemporary thoughts.

研究分野：キリスト教倫理思想 キリスト教神学

キーワード：イエズス会 人文主義思想 倫理思想 キリスト教 歴史哲学

## 1. 研究開始当初の背景

従来、日本におけるイエズス会思想史研究はどちらかといえば16世紀(切支丹時代・ルネサンス時代)に重点が置かれ、20世紀のイエズス会思想は研究対象として十分に主題化されてこなかった。

本研究では20世紀の代表的なイエズス会の哲学者・神学者の一人である、バーナード・ロナガンが提示している人間理解を探ることが、20世紀のイエズス会思想の特徴を把握する上で重要な足掛かりになるのではないかと仮定した。

ロナガンは、アリストテレス-トマス・アクイナスの思想を中心としたカトリック神学の伝統に忠実でありつつも、現代哲学・科学的発想を取り入れ、スコラ的伝統の再解釈に尽力していた。近年の先行研究では、ロナガンが同時代の思想的潮流を積極的に取り入れ、倫理思想、歴史、教育について論考していたことに注目が集まっている。本研究では、特にロナガンが生涯、含蓄的に取り組みつづけた「倫理」と「歴史」の緊密な関係性、及びそれらの教育思想への波及効果に注目し、イエズス会教の人文主義の特徴の一端を捉えるという考えに至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、ロナガンの思想の中でも、特に倫理思想・教育思想に注目し「歴史」と「世界観」という二つの観点を軸に、近代から現代にいたるまでのイエズス会の人文思想の特徴を捉えることを目指した。そこから特に、会創立当初から今日に至るまで保持されてきたイエズス会の「霊性」を、この世界から乖離した静的精神性ではなく、その時々思想の潮流と積極的に対話し応えることを目指す知的ダイナミズムとして捉えることを試みる。

## 3. 研究の方法

- ( ) ロナガンの著作を、本研究の第一次文献として位置づける。その内でも倫理・教育に関連する著作の一部を日本語に翻訳し批判的解釈をする。  
ロナガンの主著である *Insight と Method in Theology* を基軸に据え、倫理思想を読み解く為に重要とされるロナガンの他の著作(主に、*Second Collection* と *Third Collection*) を検証の対象とした。
- ( ) 人文思想・霊性史の観点から、イエズス会の人文主義教育の伝統という枠組みの中で、ロナガンの倫理・教育思想がどのような伝統を踏まえ、何を付加したかということを検討する。特にロナガンの思想に内包している倫理的パラダイム、そしてその内で構築された形而上学に注目する。そこで「倫理的人間主体」が位置づけられている「歴史」、その中で取り組むべき「(進化論的な)世界」の展開についての理解が、どのような意味で20世紀のイエズス会人文思想の発展と言えるかということを解明する。  
ロナガンの思想の研究論文は北米を中心に毎年発刊されている。最新の研究動向に即して研究を進めるために、特に「倫理」「歴史」「教育」の分野での先行研究を収集し、最新の研究の動向を把握することを目指す。
- ( ) 国内外のイエズス会の中等・高等教育の現場の動向を研究することにより、現代のイエズス会教育におけるロナガンの倫理・教育思想の発展可能性を明らかにする。  
研究当初は、北米のイエズス会学校の調査訪問を予定していたが、研究期間中に博士論文として研究成果をまとめ、発信することに重点を置くこととした。北米の最新の動向については、現地の関係者とのネット経由による情報交換、文献資料を中心として研究を進めていくことにした。

## 4. 研究成果

### 【2017年度】

初年度は、ロナガンの思想の倫理思想・教育思想の検証の基礎となる「認識論」の展開可能性について1)ロナガンの倫理と教育関連文献の解釈、2)ロナガンの倫理学を特徴づける三つの問い、および3)日本のイエズス会思想における禅仏教の受容という以の三つの点から検証した。

**課題** :ロナガンの認識論に内包される「倫理思想」と「教育思想」の特徴を明確する為に、主著である *Insight と Method in Theology* の翻訳と分析を行った。加えてロナガン

の認識論における倫理思想の発展可能性について論じている先行研究の収集と分析を行った。

**課題** : 課題 での取り組みを土台として、1)認識者としてのあり方を問う三つの問い：「私は認識している時に何をしているのか(認知理論)」、「なぜそれらの行為をすることが認識なのか(認識の客観性)」、「それらの行為をなす時、私は何を知るのか(形而上学)」と、パラレルな形で措定されている人間の行為者としてのあり方を問う問い、つまり「私が倫理的である時、何をしているのか」、「なぜそれらの行為をすることが倫理的なのか」、「倫理的であることによって何がもたらされるのか」という三つの問いの有意性について検証する。2)さらに「Emergent probability (創発的蓋然性」という自然科学的概念を基にしたロナガン固有の進化論的な世界観・歴史観の倫理への応用可能性について考察した。

**課題** : イエズス会の霊性史の中でのロナガンの思想の位置づけを探る為の下準備に取り組んだ。その最初の手掛かりとして、日本人イエズス会であり哲学者である門脇佳吉が展開した禅仏教とキリスト教との対話の姿勢をロナガンの認識論に照らし合わせて検証した。

## 【2018年度】

最終年度では、1)「倫理における方法」、2)「歴史」と「世界」観、3)北米でのイエズス会教育の動向を軸に据え、ロナガンに見られるイエズス会の人文主義思想の特徴を描き出すことを目指した。

**課題** : 前年度の課題 で扱った、「倫理的であることを明確にする三つの問い」の内、第三番目の「倫理的であることによって何がもたらされるのか」という問いに取り組んだ。先行研究を参照しつつ、特にロナガンが Method in Theology において展開した「神学における方法」の「倫理における方法」への応用可能性に特化した形で検証した。

**課題** : イエズス会だからこそ成しえた正義の促進に重点をおいた人文主義の展開の独自性の一端を、いかにロナガンの「歴史」と「世界」観の内に見出すことができるかという問いに取り組んだ。ロナガンと同時代人であるテイヤール・ド・シャルダンとカール・レーナーと比較しつつ、ロナガンが、どのような思想的遍歴を経て、「本性」を重視した従来のアリストテレス及びトマス・アクイナス的パラダイムを継承しつつも、近代以降の「歴史」理解と、「自然科学」的方法論とを統合することを試みたかを考察した。そこで、ロナガンが倫理的な「識別」のプロセスにおいて、人間の「本性」的ありか方のみならず「世界」の「進化」のプロセスを見据えている点を浮き彫りにした。

**課題** : ロナガンの倫理思想が 21 世紀のイエズス会教育へ与える影響について、「社会正義」という観点から検証した。本研究では、特に北米のイエズス会が展開している中等教育の中でも、特に最新の動向として注目されている Christ Rey Schools に焦点をあて、そこで展開されている「社会正義」の実践を、ロナガンが展開した「人間的善」の構造理解を手掛かりに分析する試みをした。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 1 件)

・ 島村絵里子、「B. ロナガンの「歴史」理解からみた「倫理的であること」のダイナミズム」  
『哲学・思想論集 第 44 号』筑波大学 哲学・思想専攻 pp.123-140, 2019 年 3 月(査読有)

### 〔学会発表〕(計 5 件)

島村絵里子、ロナガンの歴史理解からみた「倫理的であること」のダイナミズム  
2018 年 9 月日本カトリック神学会 第 30 回学術大会 (上智大学)

島村絵里子、価値判断における「感情」の役割 B. ロナガンの認識論を手掛かりに -  
2018 年 9 月上智人間学会 第 46 回学術大会 (上智大学)

島村絵里子、**Ignatian Spirituality and Zen Buddhism**  
- An Example of Inculturation and Interreligious dialogues in Japan -  
2017 年 11 月 The 3rd European Network of Japanese Philosophy Conference(パリ)

島村絵里子、「B.ロナガンの認識論における倫理思想の発展可能性

「認識者」としての自己肯定から「行為者」としての自己肯定へ」

2017年10月日本倫理学会 第68回大会(弘前大学)

島村絵里子、「B.ロナガンの世界観からみた人間の倫理的あり方

*Insight* における **Emergent Probability** を手がかりに」

2017年9月日本カトリック神学会 第29回学術大会 (カトリック広島教区司教館)

本研究の研究成果の一部として、『B.ロナガンの倫理思想 意味と価値を求めて生きる人間主体の歴史への参与』としてまとめ、2019年4月に筑波大学に論文博士としての学位請求論文を提出し、審査中である。この論文は、審査を経て、インターネット公開される予定である。

## 6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます